

古河志

下上

特別
リ5
15773
5



115
15773
5



古河志卷之下 乾

藤浪氏藏

下野國都賀郡小山莊

一 下野國

倭名鈔之毛豆分乃久仁職原抄大國とあり

諸國名義考畧曰名義毛野又なり

國造奉祀小菟波言津ミカド御世元毛野國分為上下トクワリ

上毛野下毛野なりトクワリと云字と定らばハナ時毛字ハナ

と云つと毛野と云ふ名ありと云つと野乃字と云ふと扱

毛トク州トク本トク穀トクと云ふ原ありトク今我解に謂土地之所

生トク為毛也トクと云ふり外國也左傳に食土之毛トク沼トク下毛トク草

也畧トク或書引風土記上毛野下毛野者兩國中間有

二野曰佐野笠懸野其野中有一河號渡瀨トク又有川

日佐野中川以渡瀬為兩國境川西曰上毛野東曰下毛野川東為下川西為上古今例也下

都賀郡 和名抄延喜式共ニトカノ郡トイヘリ今俗ニハツカノ郡ト云万葉集ニ不見

野木宿 南上野木宿トハ少野木ト云日光寺妻羽等の碑ノナリト云前宿ノ所ナリ

古城跡 澤沼の西を所奈屋と云り東南に平比守と云り北に石方極りて山と成り城跡ハ林蔭ニ世所云人の口碑也後小治りて川の頂築て誰に位一傳りてソツツ乃以廢せり是れ都て所々有るは或云初築ハ小山の一族の内之ともいえりといや此物おろし關東ハ別城古の遺と云一枚に摺りもふとのあり野別野木城之野木也所時基と云ふといふなり

の世屋の

武家評林 友原文田 法友 等の系図に

基親 堀川院瀧口 基貞 住武藏國野木齊藤左門大夫貞永元年九月十八日卒九十二歳

賢嚴 白山平泉 長夫 時基 野木五郎 左工門尉 重基 押垂十郎

時貞 野木三郎

東鑑ニ云治養五年閏二月己巳中志太先生義廣到干小山小四郎朝政之館之邊先之朝政出本宅令引籠干野木宮義廣到干彼宮前之時朝政廻計議而人昇登々呂木澤地獄谷等之植令造時之聲令文載詳哉中義廣取引退張陣於野木宮之坤方云々志登々呂木

澤今ハ知る者ナク一昨本宿の小松原新田ト云ハ所ノ事ナキあり耕地乃名
引ル事ト云アリ又云今引ル事ナク地ト云ク小引事ト云ハ何レ地獄ト云所也
今ハ引一或ハ澤治乃西見町古城也
引ル事ト云下ト云所ト云ク人ト云

正一位野木大明神社 延喜式外本と在田
家門初ノ古物社ト云

神之

海老沼市心

下社家武人

別當新我吉云宗 百河橋所
徳早云来

美徳山自性院

満願寺

妙寺什物法記録先任者感洞^ノ一^ノと後者感代慈盜

賊ハ奪^ハ道^ノ行^ルと云ふれ^ハ草割^ハ石^ノ中^ハ法^法古^所住^所
よりどり^ヲあ^クと^ルと^ルと^ルト^ハ傳^ス

社記畧

正殿 ウキノワカイラフコノミコト
菟道稚郎子尊大神

左殿 オキナカハラヒシノ
氣長豆姫尊
譽田別尊

右殿 タクウシヒノ
田心姫尊
瑞津姫尊
市杵嶋姫尊

所接

一本地堂 之畧

一辨天社 是古之齊殿也

一 桑松 元祿十二年 依大風倒 往還東側

一 美可久志塚 鳥居向往還之東 勸請稻荷

一 別所 康曆年中本宮回祿之時大神 奉移此所今成富

一 臺手筥 去本宮八町計 上古鎮座之地

一 注連引 去本宮東八町今在館驛之中北条家園東征伐共火本宮回祿 之時大神遷幸此所是野謂中古三野輪地也今只注連引耳

一 神馬塚 去本宮北在十奈町建仁中鎌倉將軍家 ヨリ進獻之馬後收此所

一 祭禮

二月二十二日 神樂 日湯 神事修行有古實

七月三日四日 九月九日 奉供從別當獻之

同廿九日 奉供從神主獻之

十月下子日子日 十月之御出ト云

十一月上旬日子日 御歸ト云

中子日子日 戌刻神事

十二月大祓

常陸國太守從四位源少將佐竹義昭

從軍將

伴磯龍軒大江貞元誌

一 神之覺書云二月廿二日有雲渡りの神事トウキの神事ト

云坂上田村九より始りトウキハ修多よ社後祥有

子ウー成上楓軒翁云トウキハ思りくハ討鬼カ田村九

の事成と討一事とつゝ是を面おも事之傳事也の事
 日本後記絶る事い恒ある記載あり一振振夫の今乃世
 少しも長々愈々物にわつて況將軍の領に相更けん
 然る成成功成とくく一傳つゝの故ありんと疑あり
 一に須古海流考つゝよそ付難難あり一軍さく
 攻あり一事と記せりさねの地員にわつて事一ソも
 あり一此書の書にふつ思事とある人によりて印けらる
 空ありつゝ一其事難事なるに案ありつゝ
須古海流の文も
載す事と云に
利始りとい
く物きとい

一又云冥川郡七ヶ村之内歳禱りよ以新編河神酒並赤版

等年一一度元輪者よ事之系之神を自十七日志大潔
 秋而十八日初す子別福歩内殿而用神戸酒掃畢奉納
 幣献神酒祝云中十九日午刻冥川郡七ヶ村初穂
之神供并初年神酒献之

一又云菟道稚郎子尊八人皇十六代應神天皇太子下
 野國造祝祭磯城奈利別命此命八宗神天皇第一
 皇子豊城入彦命四世君也祝祭下野奥境明神

一末社七ヶ所
 十一月歸社中ノ子炊午ノ日火渡ノ神夏前夜尔
 春渡之神事如卜ウキノ神事ナ

一 別卷

野木宮由來

笠懸野邑君記曰夫元乃毛乃國下毛笠懸野毛乃
太神者中菟道稚郎子尊乃神魂奈利古國造磯城奈
良別君此國仁行在志給比國風乃形勢乎看行給
而手上古乃邑君我圖立啓久野毛邑乃高岡仁殿屋
造作互淹栖居座給布時日日乃曉仁靈告乃靈
約利在波氣奈良別君仰天神盟于約而後奏天菟道
乃聖廟手遷移志奉利皇太子尊乃神魂乎以互野
毛邑乃高岡仁奉齊祭中雨後坂上田村九東征乃

時當宮仁詣而伏テヒラ夷乃宿禱乎為須時仁大神笠懸

老父川洲乃比佐雄我少童仁託利給比神威乃神

誨惠在互田村麻呂畏驚而親奉幣志誓天假仁草

字結互神約于盟天既仁東江向天鎮夷乃功乎成

是全久大神乃神業乃驗奈事乎察知互再度靈祠

乎瑞木森仁造營互子乃月子乃日乎以互奉齊祭

中大同中巡容乃聖者空海尊者上毛乃佐野手出

互詣来日尚志日護持乃寶鏡手奉互下

祝野毛右近大夫種熙

一 別卷 摘要

文治初春二月下野國寒川郡以租稻二萬七千束
絶布五百段為祭礼供菜之料中後小山朝政懸内
之田地以八十町寄附下野國日光田并網戸郷朝政
時

種熙四世孫祝兵衛
大夫熙音也

一 建仁三年癸亥冬將軍家神馬獻下

一 冬乃系祀或曰神體并神輿もりり以て大寺の幣帛も亦遠
大神神之資有之馬少ある事之申付家及小寺邊之妙付乃
神馬の依作の者よりかたりをて出た神りの毎度修造者
を人給と振り出立以て出社の時にも隨從者
皆く禮儀して洗あり出社も夕七付以下生井村渡り

挑灯成利中妙付渡り 寺本と家内郡迫間田村法寺社

内に幣成安聖白多才 因郡聖門村中里村法村

小袋村并是村沙島田村と一社と云ふ所り砂島田村と

おはまるといふ所向すらとらひく 寺法群集 注商人道傳小

店成安寺と云世物控業未場成後り後柄成きと云由社の

い川も本寺とて寺運との安も難ひ一丈に修りきる長年の

寺(お)ひくよ花藤寺の挑灯と照一此の野本宿(入)と

神もと但に延池とい右内照焼白魚のあり野本成りき

魚の横道より畑中と云一寺と云一に乞り巻りきり云

寺と云寺神妙則ちも修造去お家の貝と吹ひと云と

一目消去して周初成り少時神事ありて又自ら成物く
悉く大成かゝるまゝに淨潔なり七日の百すゑなり神
事ありて後本教の事納く

一 菟道稚郎子尊

許我志の八日也史と
此より今も名なく

古事品陀和氣命記畧曰此天皇娶品陀真若王之
女三柱女王一名高木入日賣命次中日賣命次新
日賣命故高木之入日賣之御子畧次大山守命云
中日賣命之御子畧次大雀命云又娶丸迹之比布
禮能意富美之女名宮主矢河枝比賣生御子宇道
能和紀郎子畧於是天王問大山守命與大雀命詔

汝等者孰愛兄子與弟子爾大山守命自愛兄子次
大雀命知天皇所問賜之大御情而白兄子者既成
人是無悒弟子者未成人是愛爾天皇詔佐邪岐阿
藝之言如我所思即詔別者大山守命為山海之政
大雀命執食國之政以白賜宇遲能和紀郎子所知
天津日繼也故大雀命者勿違天皇之命畧故天皇
崩之後大雀命者從天皇之命以天下讓宇遲能和
紀郎子於是大山守命者違天皇之命猶欲獲天下
有殺其弟皇子之情竊設兵將攻爾大雀命聞其兄
備兵即遣使者令告宇遲能和紀郎子故聞警以兵

伏河邊亦其山之上張絕垣立帷幕詐以舍人為王
露坐吳床百官恭敬往來之狀既如王子之坐所而
更為其兄王渡河之時具飾舩楫者春佐那葛之根
取其汁滑而塗其舩中之篋擣設蹈應仆而其王子
者服布衣禪既為賤人之形執楫於是其兄王隱伏
兵士衣中服鎧到於川邊將乘舩時望其嚴鎬之處
以為弟王座其吳床都不知執楫而立舩即問其執
楫者曰傳聞茲山有忿怒大猪吾欲取其猪若獲其
猪乎爾執楫者答曰不能也亦問曰何由答曰時々
也往々也雖為取而不得是以白不能也渡到河中

之時令傾其舩墮入水中爾乃浮出隨水流下則流
歌曰云於是大雀命與宇遲能知紀郎子二柱各讓
天下之間海人貢大贄爾兄辭令貢於弟弟辭令貢
於兄相讓之間既經多日如此相讓非一二時故海
人既疲往還而泣也云然宇遲和紀郎子者早崩故
大雀命治天下也下日本紀世文と大同少異
畧多終とよく

一 氣長足姫尊 神功皇后の御事云玉傳と玉物く
一 譽田別尊 為神天皇の御事云玉畧と

一 田心姫 湍津姫 市杵嶋姫
日本書記神代卷曰畧於是天照太神乃索取素戔

鳴尊十握劍步折為三段濯於天真井齧然咀嚼而
吹棄氣噴之狹霧所生神號曰田心姬次湍津姬次
市杵姫凡三女矣

一 古事記傳系圖

建速須佐之男命

多紀利毘賣命

市杵嶋毘賣命

多岐都毘賣命

亦名奥津寫比賣命

坐胸形之奥津宮

亦名狹依比賣命

坐胸形之中津宮

坐胸形之邊津宮

右三柱者與天照大神誓坐時所生坐神也

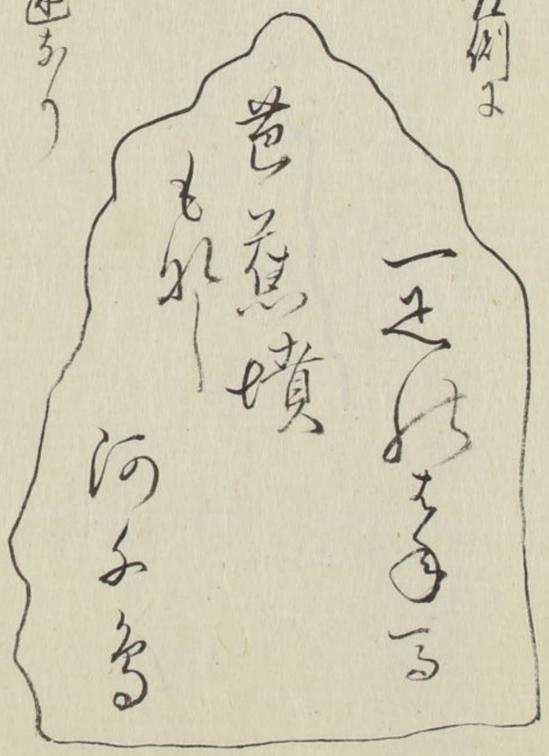
一 許我志曰一説阿呼彌次郎義昭十ル者ヲ祭レリ

ト何ツレノ時ニカ義昭京都ニテ戰破レ遁テ此
所ニ至リ死ス後ニ種々ノ靈アリシニ依テ崇メ
テ神トス此合戰ノ時紅豆圃ニテ眼ヲ突テヨリ
敗軍セリ故ニ今坎氏子トモ絶テ紅豆ヲハマヌ
ト余亦嘗テ少く同玉孫皇宮の渡良瀨川の爲了立所
此神あり此神もと義昭の敵なり義昭歎や此川にて
我とありしに涙をき候とまひらけり老氏此事果
報と白の爲に投涙一ふ世とたよりに物悲く涙りおち
のひらり追人まぬまらり海くんとせしむる勢強
く涙りこころもなほ夢にそりけり涙り星のこ

とも我昭る所方ちて進ふれせんしねしとそち人うち
くくひあをせ膝きりきりしとすねりち世の人とさる所
神とある免系りりりし友を宿せしりし

此碑二の多居の外左側よ
もてり

鈴木美濃玄母白の
能満りとのみりし
このまじりり為柳舎
ま原とつふりり云云あり



日光道中間の扁
松原新田村 友江村の新田

一 三位高良大明神社 一字

別當田舎友江村

新我志云宗 江戸左様
遷移後未

地蔵山志を院に輪坊

法音寺

高良大明神の武内宿禰の神統と系をりしと云ふ本村友江の
瑞雲八幡宮を武内と云ふまじりりしと云ふす神階
お北左文政のまじりし吉田家へ三位と一色一は根元の
屋一は二位と云ふりし神は一は作と持りりしと云ふ

二位とありしは武内宿禰に在りし樹木を禰と云ふなりと

一 日本史一百八卷武内宿禰傳曰仁德天皇五十

五年薨帝王編年紀為七十八年薨今從水鏡公卿補任武内歷仕景行成務仲哀

應神仁德五朝在官二百四十四年不詳其年壽補任

水鏡補任曰二百九十五歲又曰不詳沒年水鏡曰二百八十歲石清水社司系譜曰三百六十歲曰二百五十五其餘衆說紛紜五雜俎引日本記曰武内年三百七歲然日本記實不書武内薨年謝肇淛所見或別是一書也今無所考立祠因幡祀之宇倍宮也高良日録記良明神今從諸神記說見神社志及建應神宮以武内配食

一 石清水別當澄清云上高良武内也祠在迴廊乾傍中神社考曰高良明神者武内宿禰之靈也下部

兼隆抄曰上仁德天皇五十年薨給御年三百六十

二 歲因幡國上宮山中衣冠ヲ入給謠曲拾葉抄摘要

一 九別記卷拾五云筑後國高良山ハ玉岳命鎮座之

地也此玉岳命ト申ハ物部膽咋連ト申テ神功皇

后ノ御宇ニ武内大臣ト相並テ朝廷ヲ補佐シ殊

二三韓退治ノ御時勲功許多ナリトカヤ因テ

八幡大神住吉大明神ト相殿ニ祝ヒ奉リ物部氏

ノ祖神ト仰キ奉リ下

如新事記云ハ周列ノ靈氣ニウツルルヤ云々

一 友沼村ありハ幡宮ト異別仁成の神我の勳徳ナリト

傳承の... 池文... 神宗... 別當... 地法...

赤塚村

妙門の昔者相馬將つの暫在障... 字... 号... 赤塚中根... 中根...

新義
志云宗... 寺

帝真山清水寺
清淨院

耕地... 願... 今... 福... 女...

赤塚... 赤塚...

赤塚... 赤塚...

右傍勢至
正面阿彌陀
左傍觀音



いふも年種りたる古代の物と云ふ

世墳馬所塚の名あるの事と云ふ外は傳ふか一或は將門
と陣の程一族の内流をいへば或は蘇我の事なりと云ふと

一 爲偏より左浦と号して山林あり元祿の頃松平伊豆候
古の城とあり跡ひ一時別名あり一跡あり古は津守と
し者あり一先世村長なり一時に世傳の新築と云ふ世
跡ひ一時にありて津守と云ふ一跡あり古は津守と
然して程もかく伊豆候傳者あり一別の名園と云ふとせ
跡ありは石園と云ふ津守と云ふ跡あり山林と田畑
とす長谷門と自ら云ふ跡あり別名ありと云ふと

棟札より一その所の屋敷然り一殿を介跡物敷の去り
の丙午凶年の時長瀬と云ふと云ふと云ふ

一 世伝書傳屋浦内より界塚と云ふ小塚あり名我山詳
水傍にも界塚と云ふあり一十間口あり一塚に福前茂
と云ふあり一その外も世傳書と云ふ一臺腐建と云ふと云ふ
ありと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
塚の是も詳あり一其人の地内はニツとも云ふあり一其の
所所塚の是よりと云ふあり

佐川野村

津古志宗 高知
和年野寺集

高野山正宮院
法得寺

高祖聖人齋於二十日拜の寺也

カレおの事古の
高野寺の事

一 性伝房の祖師哉後流龍河教と云得京を以て園東と勧む
とて常陸下総と野上野の由と云の御して上戸板倉村の
大圓寺に滞留せしむ板倉沼の龍成と云の御して今
世河上と流龍と云なり祖師自他の像等乃の本寺に
江戸浅草教恩寺より事と云ふなり首身と云う神と
云ふ後小首と振て一と別今の祖師の像と云ふ園東
勧化して祖師ゆきの所築根と流ひりて祖師の御

成云二條の
法院の建保
二年性伝房
性伝房の御
得る一院

海ハ冥事と在りて我法と云ふよりて度一玉とも性伝房
少くも初と平日とつと有りて是の御相腰と云はつと乃
河法院の像と出と是と無言にたり園東(瑞正)性伝房
いと在りて流龍と云は度一性伝房村(瑞正)性伝房
今の二條の法院あり年経と云ふたは祖師言年経と云
けあり今と及ぶ事と云へて上京より道素名流龍と云
親聖聖人病と切なりと云は相と云は流龍と云ふ事と云へり
高野山九拾九死一生の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふに
流龍と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
外に公に事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
性伝房
是云

一 鐘樓 鐘銘 畧

聖德太子於日本猶如釋迦於天竺周孔於震且所以雖去其世千餘歲之下在々所々立廟堂奉讚不忘如一日粵下野列太子堂法得寺者性空法師普濟上入之中興而澶タニ空皈依師也代々法脉流傳啓發大衆鯨鐘中絕無干今矣夫禪教津院法器之制莫先於鐘故建寺安衆不論大小聲必先備焉也林中繫華鐘菩薩聞當集諸欲聞法人聞此妙音盡當雲集云々畧

元祿十六 癸未十一月一日 賢成普門信通

當山中興開山惟信法師普濟上人二世澶タニ空上人三世信海上人四世惟順上人五世順岡上人六世澶水上人七世慈向上人八世信了上人九世廓信上人十世空山上人十一世宗順上人十二世性伯上人十三世正玄上人十四世淨信上人十五世可叶上人十六世教順法師十七世傳燈上人十八世淳識上人十九世教運上人

野渡村 已下屬中郷

曹洞禪宗 或別成田 弘圖寺宗

西光山

満福寺

左の臨派流し寺に字の代より一或^{年月}
 移りしり其代より寺のなを或^{年月}
寺もちり
 切道はだり

のり

表書
 堀田筑前守敏成之公の書付和

の光満福寺初開を年代なくい流下^化の鎌倉末
 寺之別下^流の流^流の流^流の中古の山元年改^改曹洞宗
 余来^来百七拾七年之^之時代法^法之^之山五山在^在昌寺二代結
 山和当^之礼坐^坐来^来展^展持^持往^往中^中絶^絶後^後法^法開^開正^正統^統寺^寺十^十代
 大^大和^和尚^尚也

一 山^山の^の言^言氏^氏公^公立^立代^代 中^中成^成氏^氏父^父子^子在^在山^山能^能正^正和^和尚^尚相^相傳^傳成
 洲^洲之^之地^地之^之曹^曹洞^洞宗^宗改^改氏^氏公^公正^正統^統立^立之^之人^人法^法幢^幢在^在刻^刻為^為
 寺^寺料^料野^野原^原女^女下^下宮^宮女^女の^の也^也

一 東^東照^照控^控規^規様^様河^河入^入國^國之^之時^時代^代南^南寺^寺先^先任^任表^表願^願生^生之^之也^也
 控^控規^規様^様河^河子^子習^習之^之河^河津^津其^其故^故公^公而^而同^同也^也其^其河^河津^津降^降より

還^還河^河之^之与^与乙^乙女^女河^河原^原より川^川に^に下^下り^り其^其故^故公^公而^而同^同也^也其^其河^河津^津降^降より
 河^河内^内河^河津^津河^河津^津出^出向^向の^の酒^酒意^意之^之懐^懐中^中之^之也^也一^一拍^拍之^之控^控
 益^益河^河津^津城^城雄^雄能^能四^四活^活の^の也^也河^河津^津連^連約^約之^之中^中法^法之^之也^也又^又古^古代

一 河^河津^津市^市亦^亦少^少心^心在^在右^右十^十二^二寺^寺之^之業^業其^其心^心書^書出^出河^河津^津在^在也^也
 河^河津^津書^書出^出之^之武^武拾^拾石^石之^之何^何系^系其^其末^末也^也河^河津^津年^年目^目也

沖永年城之
 公家女
 三月
 出有之
 事之
 隆方云

抄外之石と重平公膳方史殿
 大猷院様沖判形先年於江戸板宿
 天和二年戊午九月十日
 酒福子
 原 立判

一 公儀沖代替り、夜毎石公書付の内書板
 於此中、お守り様、大建蓋、茶碗、茶入の、茶葉、茶入
 左お願仕、今、付物、所、在、也

右之品、私にお見せ、願、左、通



一 永享二年附、為乾亨院殿、寺、去、年、相、定、野、原、英、
 卜宮、以、奉、寄、附、畢、と、如、き、ある、古、文、書、一、色、付、物、よ、り、と、
 現、任、隆、方、和、尚、之、り、未、及、
 一 河内、堺、城、内、の、
 寺、之、り、も、何、れ、り、か、く、名、付、り、る、傳、へ、る、事、也、と、之、り、奉、
 る、に、乾、亨、院、殿、と、も、さ、め、一、色、付、物、に、成、回、新、洲、寺、に、持、
 尊、氏、公、五、代、ノ、孫、持、氏、公、永、享、十、三、年、二、月、十、日、相、
 刈、鎌、倉、ニ、在、テ、生、害、法、名、長、春、院、殿、楊、山、道、抑、居、士、
 卜、号、ス、其、子、息、成、氏、公、鎌、倉、ヨ、リ、下、総、列、古、河、ニ、居、
 城、入、畧、明、應、六、年、逝、ス、法、名、乾、亨、院、殿、久、山、道、昌、大、

一 河内、堺、城、内、の、
 寺、之、り、も、何、れ、り、か、く、名、付、り、る、傳、へ、る、事、也、と、之、り、奉、
 る、に、乾、亨、院、殿、と、も、さ、め、一、色、付、物、に、成、回、新、洲、寺、に、持、
 尊、氏、公、五、代、ノ、孫、持、氏、公、永、享、十、三、年、二、月、十、日、相、
 刈、鎌、倉、ニ、在、テ、生、害、法、名、長、春、院、殿、楊、山、道、抑、居、士、
 卜、号、ス、其、子、息、成、氏、公、鎌、倉、ヨ、リ、下、総、列、古、河、ニ、居、
 城、入、畧、明、應、六、年、逝、ス、法、名、乾、亨、院、殿、久、山、道、昌、大、

居士卜号ス當寺末寺野刈野渡邑滿福寺ノ開基也御廟今ニ彼寺ニアリ并華下ノ兼裁ノ廟アリ今ニ大樹ヲ裁ス云々

一連歌師兼裁之墳櫻一株白栴

樹下碑

文化六年己巳高田相當

正定寺住持の建所也

永昌七庚午六月六日卒

耕閑軒法橋兼裁公羽墳

花影りて名のみ

松影や墳橋

許我志曰本朝遼史曰兼裁者関東人其姓平氏其

先出自三浦从自桓武天皇至其父式部少輔盛實二十四世兼裁從壯年精連歌凡風花雪月江山雲烟之景皆以遣興王候達官爭迎以為邀頭慈照院源義政授宗匠後土御門天皇御製之連歌兼裁奉教進批點者數矣以耕閑為其軒號禪僧周麟為之記兼裁往來于京師于関東曾結草庵于奥州之岩城而居一日卦相摸國湯本贈尺牘并和歌于宗長宗長是宗祇之弟子而連歌為業也贊曰連歌之於和歌猶如聯勺之於律詩也本朝上世以來久有之而嗜焉者不絶兼裁專業之者也值其吟哦而鍛鍊

安排殊無他想以是閑也播藻言之苗于硯田以耕也宗祇亦其同時之先輩也凡有一技一能者皆到京師當時風塵之驚故避輦下而或歸本土或散四方者蓋夥矣兼裁幽棲于岩城亦是也柳古今集之傳授和歌之輩以為極至當時法印克孝傳之克惠而兼裁受于克惠而以授兼純是兼裁之從弟也

一 又曰坂田成之筆記云兼載法橋真別格高代よきと一人を主父と格高代武敏少捕成実とせしむる氏と子氏とを浦女より娶りて世にあり思とせり若かりし時よりおのゝをたすむるいひかゝるべき整りや武士の家と出くす

言に世控人なり彼名よき成りてうに法の橋の中さねて後文見事と帝の業とそ慈仁文昭の順がよ珠玉菴家徳充つつきと筑波の道より成ふ免佐保川の水のそひあ記文り哉結ひるより名名ましく光葉下草世二集家徳のり集ありのあつちる姿あはれそはたまこのまひひよるあややくつる形物りて成りひびよまなりよりそむと成みは集と園の産と名分する集あり祇とあつひと山野雲所の別あふさねし時この年の事と主訓ありききふいひと梅とあふ歩のくさる

是より一々かき傳へるもかゝる梵師の帝の御製をとりし
強りたる事ならずして慈照院殿と常にかゝりて宗西と
ちかぬ道の事と尋ひてあはれむるもかゝるに花開風
靜なる代にわひ柳宮露濃なる惠と傳へるもかゝる侍
一々又古く集のうちに傳へたる事とあはれむるもかゝる
事なりと和分所之法平亮考より考惠と傳へるもかゝる
考惠妙法橋傳へるもかゝる明惠の法勅撰に在るもかゝる
珠玉菴の形筑波集と云ふ事と申すもかゝるは坊り
料女の句成加へるもかゝる世道の不備と云ふ事と申すも
左きり一祇公の弟子の中にいづれと云ふ事と申すもかゝる

人の問するもかゝるにふらふ口はなむ事と云ふ事と申すもかゝる
らむ事と云ふ事と申すもかゝる祇公少玉の梅と云ふ事と申すもかゝる
策根山成と云ふ事と申すもかゝる湯中と云ふ事と申すもかゝる文月
つまらりの叔雲と云ふ事と申すもかゝる成宗長葉庭宗願月桂と云ふ
事と申すもかゝる後河本の境桃園と云ふ事と申すもかゝる定輪寺と云ふ
事と申すもかゝる事成と云ふ事と申すもかゝる岩城と云ふ事と申すもかゝる
世にわたりて傳へる事と申すもかゝる湯中と云ふ事と申すもかゝる
一々甲斐と云ふ事と申すもかゝる詣と云ふ事と申すもかゝる文と云ふ事と申すもかゝる
河の玉葉庭の事と申すもかゝる送りと云ふ事と申すもかゝる長分と云ふ事と申すもかゝる
おらる事と申すもかゝるおらる事と申すもかゝるおらる事と申すもかゝる

一 津の主人法橋保信実徳のと云ふ人記す物も裁す物も
と津小字深と云ふ所の曹廟の市社有るに母寺の祈望
との一とまふけりて裁師と云ふの名宗まふひと
かの社の地系津の主人吉也似松原と有るより蓋せり
う唐一住吉の松とありよりそま禁りて改よりと云
一 白石先生仲書云昔の連袂師兼裁事一古信の二信ふ
所と云ふ所の者の慈師と傳へんより求淨一連劫傳せり
古神の社今に在り湖水の邊より一本の松ある所に古村乃
古屋の下女よまふりてんふりて裁ありりといふも所や

ある人彼古神或伝作深くして帝にいと由の夜ふら福川
ある年の室の内に奥の地ある所に雷澤の中に社乃
折の久矣二川結ひてと見えく可いふ川も是と云ひて川の
おのうらふふあせりて是よりうふ事おくそなむまて
花よりりの男子成うむ二三葉のひよりまいたておふ事おむ
事ありて後師につれく遂にちりて古成強とて是れ裁
なり今に古古神の社所の跡もと作らるるそこの古氏
等世固のえひすくされ今もいふもく和分の所を
んは思ふのかと云ひて裁事丁る言月かたりと云
一 古河郭内小橋所と云ふ所あり是れ古古古信乃昔兼裁と

石巻に富長寺の泉の意様と称す極楽寺の泉といふ
今に石巻の地もなりと云

とら馬村

一 寶樹院教所齋所 字む川やこし耕地内古木の枝より
され別所誕生の地なりと云

一 以美小傳岩云 嚴有院所所の所毎とす於りくの局と云
所父と書本之右所利長とす小所玉於賀於言馬村の人
なり同一玉治同村の増心織於娘世と云ひと云り
娘武人との武人成りりり所娘とはふと云娘とすありち
おらく度なり男子と云成女助成女助と云ひけふ

寛永永正年所父利長之拾之歳うし其妻も六所母世もて成
こもなりひ多ひ士海化は其の清宗とす者娘一は所の所州
よ信もこもり寛永永十年おらくの所方の年十二と云

大猷院の所所にあり住こ同一地十八年の所所

若君成まけしとす所儲副と云後れせむひと云らくの
局もおらたふか一つは是給ひ所母むと云らもさうおらたふ
成り増心と云す所所と云る所所川成於大輔と云知の家と云り
所所武人も所所と云らこれ早も増心所所所所所所所
三別所尾の城と云らと云らと云らと云らと云らと云ら
もとより月傳武百名と云らと云らと云らと云らと云ら
中 慶安四年

大猷院河内から進み、後醍醐天皇の御方、室樹院殿と
す。御方に在る義忠元年、清和天皇の御方、室樹院殿と
伊香保の湯よりみまひりて、心足浮ぶ少跡、口信よりふ
ゆつと、心足屋敷、目師に在りて、世移ひて二月のま
うせ、おの年、之拾とて、そのけ、後醍醐天皇の御方、東叡山、思沙門
堂のより、よか、おの年、世とありて、そのれ、思沙門のより、
め、そのの、清法とて、おの年、世とありて、そのれ、思沙門のより、

本多大隅守正純家来 寛永年中人
青木善兵衛 法名淨心院殿秋月善性大禪定門

青木三太郎 性参
高家呂川式部大補高知室
増山氏娘仙光院ヲ娶ル

二女 贈二位寶樹院殿花誠天栄大姉 於らく極
大将軍家細公御母

三男 從五位下 増山彈正少弼正利 始テ増山下改母方ノ氏也
参刈西尾城主二万石小字青木舟之助

四男 那須遠江守資徳 野別那須馬山城主二万石
小字青木友之助

右四人高嶋村ニテ御出生

仙光院殿御子 三千石大和国俵本
從五位下

五男 平野丹波守長政 一万石
六女 毛利刑部少輔元知室 今六万石

青木仁左門 淡路 先年古河城主并大炊頭殿ヨリ五人扶持被下
諸役御免ニテ百姓

一男青木七左門 増山彈正殿ヨリ三百石被下
家老相勤

二男 青木長左工門

高嶋村諸役御免
ニテ百姓

青木長左工門

青木長左衛門

青木七郎右門

上高嶋村百姓

百姓

友右衛門

青木苗子

是れ青木の裔なり今ハ血胤絶也其在家名の青木ははらへく
勢別長治の城之坊主候より三人扶持候より例年 初まはらへ
麻下名一と刀帯一と青木左衛門と号し江府坊主候一
と年賀の成り候と云

一 中一室は元と下流の系譜

鶴牧茂右工門

本多大隅守正純家末
高嶋村之人

姉 崇心院

二女 栗山傳左門妻

三女 高覺院殿

右御三人高嶋村御出生

姉 小屋武左工門妻

二女 五之御丸 今三之御丸殿
御若名おとん様

徳松君様
鶴姫君様 之御袋様

元文二年御年八拾余ニテ御逝去被遊候由及兼申候隨心院様ト
申奉ルヨシ慥ニ及承申候但瑞春院様ノ御事カ分明ニ相知レ不申候

三女 白須左兵衛妻

小石川御新造様 江申ニ三千石
後ニ光政院様ノ御事

此郡牧家の事一と云ふ爲村名に因ひ見ゆても今も此郡に
あや村内にたえりて云ふ事

一 以貴小傳 畠田お傳の局ハ小宮権左衛門忠宗の娘なりしが其母ハ
り跡の玉古河の人なりて寛文十年の頃信林林桂昌院殿に
之を侍りてありしに信林及御目よりあはれみせりて事
中寛文十三年の正月六日神田の御館より徳松長生に嫁ひ
しに其母も信林の局の御父権左衛門忠宗の御方なり
おはりて下りりおはりて一は信林及御目よりあはれみせりて事
中寛文十三年の正月六日神田の御館より徳松長生に嫁ひ
しに其母も信林の局の御父権左衛門忠宗の御方なり
おはりて下りりおはりて一は信林及御目よりあはれみせりて事
中寛文十三年の正月六日神田の御館より徳松長生に嫁ひ
しに其母も信林の局の御父権左衛門忠宗の御方なり

寛文十三年に於
て小宮の御方
おはりて云ふ事
中寛文十年の頃
信林林桂昌院殿
に之を侍りてあり
しに信林及御目
よりあはれみせり
て事

惣大権現社 一字 祭神ニ輪太助

大川河村 西ノ河原 権左衛門

二百年より云ふ事元禄二年十月御前と云
中 中 母も云ふ事院と云ひ
移りて事見ゆりて事信の事い事考一は 畠
柳原の内にて宅を移りて信と云ふ事一はの丸殿もあり
は元禄六年の十月元禄六年の信と云ひ
中 寛文六年 中 河川がゆるせ移りて事信と云ひ
一は信と云ふ事一は信と云ふ事一は信と云ふ事
之年の正月九日に信と云ふ事一は信と云ふ事
らあや河川科系武河信と云ふ事一は信と云ふ事
あはれ信と云ふ事一は信と云ふ事一は信と云ふ事
中 寛文六年 中 河川がゆるせ移りて事信と云ひ
一は信と云ふ事一は信と云ふ事一は信と云ふ事
之年の正月九日に信と云ふ事一は信と云ふ事
らあや河川科系武河信と云ふ事一は信と云ふ事
あはれ信と云ふ事一は信と云ふ事一は信と云ふ事

あはれ信と云ふ事一は信と云ふ事一は信と云ふ事
中 寛文六年 中 河川がゆるせ移りて事信と云ひ
一は信と云ふ事一は信と云ふ事一は信と云ふ事

別當

新義志玄宗

下り流村
室家あり

徳大寺

光明寺

社造管屋瓦城より志皆小山家ニッ巴の海洲と今於
用の石多居村より元禄辛未の年より進願之朝念ニ良
戸田主家と彫り世安といひ好も人も好く知りよの
ち

神宮の神心豊後くして百姓少し神一うき好後後嗣子
常事のこも世徳一社職のこも徳徳くわい今に徳り
と云

一惣大権現由来

朱雀院御宇の康平二年壬辰秋平将門謀叛成金其
沙汰帝都に建一敷安女一以主領在原秀御武
勇の善道天下ある一速く是成津成之に建大將と
撰せり於隆延將の善美の働とく一人の及所ふり以
偏に神助の如護成法いよんい思りく一宣命成和いん
くこといひ大已貴命に祈相云一して宇成建之に一徳とを
すに果して大云又二年庚子法教成就して將つる徳を
天下泰平に成り平尔してより於外小山家中家大為
清原之店の徳と社と一して惣大権現と宗教一と云

古老の傳也此後小山城之前位濃も敬より状より之の
惣社宗敬より此地の系法後多官免陳より又官徳を
よ同城之前下野も敬より古川も同之捨費文書を状
英海幹より判形を外生約材内法同の内
多附く快ふ好色現より有り右惣社性古の孫死有
之由人可又唱所とんも中古終矣とて今ある無後
古より大徳より及ひ之庄の内事契位隨分のよりあり成
之付滿一再無の序に古来の通成より進よる也

寛永六年
己丑三月十日

現列尚
秀意 印

一不苑古文書之内称左の載候
野之紙

中泉庄総大権現者為三
庄総社宗敬異于他
上者細々飛脚臨時裸
役以下所見陳也向後
可被知存其方々状如件
正長二年九月八日前信濃守 印

當社別當

裏白州紙

大河清郷々
田淳一田之事
如ふあしる家
水奇進作
有也他い
海々

春日井政轉感

上二周

いっすまのらん地
まつ代ちまやう
アッそ海し
有常政既
そう大別當

惣大別當坊

東水代村

又榎本宿と云

水戸より中山道へ引馬次より榎本宿と云り古の宿
世尺よりく道の中央にまま程の浅家流を引て清洲
なり右右の河は日蓮宗の杜君のむねの同好に
のひふくは藤一と云親なり

一 水代村の村の堀に古の榎の葉あり
いさうありて城内城堀のたけより一丈七尺も
古榎二株と云り其榎葉一時世もありと名
口解あり

一 古城跡 榎本城と云

小側町屋裏軒代と云今や隄壘の形跡あり然るに東小
の方面より村入と云山林と云あり

新伝書云今川佐治が又武州榎本城と云松原義忠が官軍とあり大野別
榎本の事と云下巻武州と云此名ありと云り是と云く甲老と云くも
と松の事
傳りてはと

一 楓軒翁之烈祖成績日天正十八年五月結城晴朝
將兵攻下野小山上野榎本二城拔之 松榮
記事 秀按スル

二 松榮記事二上野トスルハ下野ノ訛十ルヘシ

一 此城初築ハ永祿元年戊午に小山の族長源清之流因吉為園
よりあり攻め落城と云信より傳りたり 小山源清と云云の二三種
関一と云はる源清の名

見ると只生駒右の農氏より云く一傳りたりと
ありと永和四年宮榎本吉勝ありて官名あり

一 佐野記 佐野記別本原伝書元
信林記等右同也 曰藤原の城に佐野義定が榎本城に本多

左衛門右衛門(宗信)と水戸の城に佐野義定の旗下一

の部一と云小山原氏連の旗下一と云宗信父一と云り物く

由しと云榎本城と云せりと云内陸と云く源氏の侍ありて所

留と云源氏に佐野と云榎本の事伝書ありと云小山と云七所

右將と云くと云り別の荒侍と云六人思付かけし榎本城の事

榎本城と云く榎本城の事と云りと云榎本城に己より老く

と云り内陸と云く佐野と云小山と云見付ありと云

と云り榎本城に榎本城と云戦りて榎本城をたしと云七人

おあると働き通るも寸の云甲斐の如く川區と宇都宮に
ある法度の思付事さるる勝利を以て及す侍成太勢
討せぬ事成事しと云之股は成事と孫中而目成事
を成事にて切腹せんといふ事申根本孫成夜とを合し
討成事いし事ありとありと申田成事と成事なりと成事
と成事の事な未だ成事と申成事なりと申成事なりと
成事なりと申成事なりと申成事なりと申成事なりと
申成事なりと申成事なりと申成事なりと申成事なりと
申成事なりと申成事なりと申成事なりと申成事なりと
申成事なりと申成事なりと申成事なりと申成事なりと
申成事なりと申成事なりと申成事なりと申成事なりと
申成事なりと申成事なりと申成事なりと申成事なりと
申成事なりと申成事なりと申成事なりと申成事なりと
申成事なりと申成事なりと申成事なりと申成事なりと

一 武書云云下師の玉結城の城之中野左輔時朝と小原の藤

下なりしと云及秀吉公の向ふと云く佳成城事なりと云
味方侍しんと申送る秀吉候なりと云其一切によりしと約
事あり候なりと云十八年二月下旬軍と卒して同玉接
本の城へ向ふと云其日其の致し城と云及出羽女も一條氏輝
候に依りて武州小玉寺の城より移り置候言楊清丸御に
軍と云拾余人候一畢事也隨ふと防事なりとも小野事なりと寸の
一と云子門成攻候も城申く敵也入り進めし言楊清成事
晴朝清と云城と清丸入敷と云

一 城主譜大概 永禄元年九月に根本長清が武拾七万石

を以て七年と申七年に城に源守佐野勢と成公因在野田

ありし討死 里老 万正三年の十八年とを藤少羽が在城
 武州八王子ありし討死 大甲寺 住持活 楓軒翁云古今城之沿革之
 十六相換少田原の條より條氏輝公父子據本支城之と
 是のを友也羽女ハ氏輝の城代なりと記して正十八年より
 本支は後よりなりと云長正二年と十八年と同云長正二年
 ありし大隅と城と成りて是方石和坊ありて今今之なる
 ありし實永八年未正一月十日大隅を逃去と母永年在城
 慶安元年子十月慶城一城入也とて予料所も岩根松花
 山末末常 万正八年より下 新伝の考あり

曹洞禪宗 萬正五年武儀院 園町松巻寺末

古平山

大甲寺

永亨年中 小山家の家墓といひ傳へても古平より
 法記録帳亡と伝へて傳へる如く詳ありし古平深地之所
 附せり 住持活 小山の法書同小山田村大甲寺 上層ありい富田年 古平の古平の寺あり
 前住より内依法持して建てること 村長 妙寺園墓の古平
 なるなり代村延命を奉りて居る地ありし事なり古平寺
 ありしと本多忠純城之の付あり寺入替りせむといひ傳へ
 るありと 松本一 活
 一 門前制札ハ豊長右衛門の賜ひ也 楓軒翁云筑波藤清末もあり古平 小山田氏の付ありと云あり

禁制

下野国

大佛寺

一 軍勢甲乙人多礼妨狼藉云々

一 放火云々

一 對地下人百姓非とて尸をり云々

古く集り望令は心死若おを犯し案忽

つる要處科去也

二十四年三月日 津系下

一 逆友家の墓二墓

玲瓏院殿浄鑑大士居

右傍二 天正十八天
左傍二 六月二十三日

圓明院殿照月士居

文禄三
年正月
十八日

管窺武鑑茅八攻落武列八王子城車ノ條ニ曰武
列八王子城主北条陸奥守氏輝ハ小田原ニ在八
王子城ニハ家老横地監物初名典三郎狩野一菴本名小幡并近
藤出羽守其外人数多守之景勝利家両大将六月
廿二日被押寄利家ハ氏邦ヲ相具シ其家老横地
左近ヲ案内者トス景勝ハ大道寺ヲ案内者トス
両大将八王子ノ山下横山ト云所迄取詰明日城
ヲ攻ント被相觸板横地左近方ヨリ弟ノ横地監
物ニ小幡一菴両城代方へ申入サスル其程様子

ハ小田原既ニ及滅亡氏政公ヲ始陸奥守殿以下
モ悉依降參氏邦モ後道無勝利事ヲ思ヒ萬卒ヲ
助ル為ニ城ヲ渡シ今此軍門ニアリ其外大道寺
駿河守ヲ初北条家之城々皆降參セリ各モ陸奥
守殿降參ノ上ハ城被相渡可然候於違義ハ還而
陸奥守殿御身上モ如何ニ候上杉羽柴ノ兩將如
此被申候氏邦モ右之通申遣候ヘトノ義ニ候間
御評議迄有間鋪候ト申入城代兩人ヨリ返事ニ
仰忝候得共我々莫陸奥守此城ヲ被預置請有罷
在候各降參セラレ候トテムケト可渡此城覺

悟無之候命ヲ惜ニ侍道ヲ捨候ハ、城ヲ不預義
也預ル程ニテハ城ヲ枕ト相窺ル今各臆病人ノ
申事ヲ誠ト思ヒ城ヲ渡シ若詐ニテ其方ノ行^術テ
乘リ候ハ、弓ヲ踏折自害シテ惡名ハ死後ニ及
テ先祖ノ名ヲ汚サニ事勿体ナシ臆病ノ各ノ被
申義實ト不存候陸奥守ヨリ城ヲ渡シ候ヘト直
筆来ラハ城ヲ渡ヘシ左モ十クハ我々首ト共ニ
城ヲ渡シ可申候叔又各諸人ヲ助ル慈悲心ニテ
被渡候由我々者慈悲後世モ不入武士ノ義理ヲ
不違様ニト計リ存候大上上下下共ニ主恩ヲ得テ

武士ヲ立ル者ハ命ヲ可惜様無之ソコヲ達テ道
レヨト申セハ義ヲ失ヒ虚名ヲ蒙ニ事迷惑也ト
還而歎キ候ヘハ當城ノ諸人ハ各ノ如キ義理ノ
違ヒタル臆病ハ無之候ト悪口ノ返事也因茲六
月廿三日北国兩大將ハ八王子城被相攻大手へ
ハ利家印刻被向先衆矢初アリ搦手へハ景勝被
向然ニ藤田能登守被官ニ八王子ノ者ニ三人有
之内ニ平井無邊ト申者此城ノ案内ヲ能知リ東
方谷間水ノ手ノ道ヲ傳ヒ三九一菴曲輪へ押上
ル道アル由ヲ藤田聞テ透波ヲ用ヒ存候ヲ遣シ

不危儀ヲ知テ平井ニ案内サセ藤田備ヲ押上ル
搦手口へハ安田上総ハ備ヲ以テ一番ニ攻懸ル
大手利家衆へハ城將横地監物二百騎計門ヲ関
テ突テ出加賀無ヲ突崩ス
此時ハ王子士一番鎧ヲ合セテ高名
仕タル山本吉太郎左門當案内ニ在然
ハ藤田備共ニ歩二十リ無難ニ押上リ逆茂木ヲ
引倒シ関ヲ作り攻懸ル小幡一菴坂口ニテ防候
時案内者ノ平井無邊一番二人ヲ撃夫ヨリ入替
々々攻破敵崩レテ一菴屋鋪へ逃入味方之ヲ追テ
入暫攻合ノ内藤田相備ノ甘藪備後守一菴屋鋪
ノ後へ火ヲ懸焼立テ切入故一菴并近藤出羽守

等皆討死也然ル可へ搦手表口ノ方ヨリ越後勢
各攻懸業入云中上杉家へ討取首數雜兵合三百
七拾三之内能首ヲ撰テ廿一中皆首桶ニ入首帳
ヲ相添廿三日申刻小田原へ遣ス也中小幡一菴
子狩野主膳中山勘解由子助六此者共小田原滅
後 權現様被召出頃年中山勘解由八此助六也
今茅水戸ニ罷在中山備正又備前守也
一 楓軒翁日烈祖成績曰武列八王子城主氏照在小
田原使横地監物守子城中山家範守中郭近藤出
羽介守下營利家景勝攻之城兵堅守進攻山下營

破之出羽介戰死 云 年譜創業記秀吉
家譜松栄記事

某 近藤出羽守 喜左門 重道 出羽左門 女子三人

水府系纂云近藤喜左門某父ヲ出羽介ト云八王子ニ住ノ北条氏照ニ
仕八天正十八年庚戌六月八王子籠城ノ時本丸ノ城代トナル太閤記北条家
滅亡ノ後浪人トナリテ終ル喜左門元和年中中山傳吉方汲引ヲ以テ
威公ニ奉仕ス三百石ヲ賜フ翌寛文三年癸卯十月十四日致仕シ四年甲辰三月
十一日死ス出羽左門重道初名十兵衛又喜左門父隱居家督ヲ継三百石ヲ賜
フ翌元禄三年庚午正月二十二日死ス六十二歳對男子無ノ断絶ス

一本多忠純墓 九輪大石塔婆也玉垣圍之

前善伯大居士 寛永八年 十二月十六日

下野國都賀郡東水代榎本郷古城主前隅州太守
長嵩善伯大居士奏還郷曲宗寛永八年未十二月
十三日也靈塔四序猶還重月連年迨垂百歲被侵

霜露雨淋日炙將頽倒其殆如嬰兒行或如臨深淵
如履薄冰山野主之深嘆矣今也享保十乙巳年初
夏本多帶刀政淳公本多房列政繁公命家臣石津
七藏可久加修覆彼臣使工琢磨飽盡忠誠所致人
力者當鄉近邑隅列君之舊臣之末葉等各齊加力
未逐日亟成舊物果然似現新本有風光而後之視
今亦猶今之視昔故綴一章紀之云尔

驚起那伽定裏石 琢磨呈孝盡精誠
奮碑改觀窺天外 鐵壁銀山風物盛

本多帶刀家臣奉行

于時享保十乙巳四月

石津七藏可久

舊臣榎本宿加役 藤倉庄右門重當

前總持兼龍泉大中寺世德鳳誌

一 藩翰藩之佐渡も正佐男子一人あり痛子と師分正純之男
安房も改重も加賀にあり之男大隅も忠純將軍家も佐
右坂の合戦もあまもより押もせ戦ひ首武百十七切もも
其幼も多も〜 所願加玉り
い〜得か〜〜〜外の福よ〜〜 忠純
新佐藤家筆記よ

武子八十石

野別樓本
本多左馬守忠純

但安長十年田庄二万石元和五年野別門領事方

八十石

安永九年

同日

同日 左馬守西邊

日千九年

同日

同日 大子代

日千七年五月十日

辛未年三月十日

一 江城幸路云安永八年十二月十日本多左馬守西邊より
系の如く於東馬場家系（中略）大隅守成石守家（中略）は六左馬
目領物ありて人より少一の領ありしも家系移り成敗あり

と却るに城裏の別荘より大助成成後と大隅守
より名を中へを秋田に六百に死す

一 小山家の古墳より物をも少くして誰とも知さるる
は古墳あり同日より

春庭院殿善發清香大居士

如新形付るもの事あり日にも
たし古寺少くもわらぬなり

一 焼死にりしる文書

大甲寺若任信公様所

寺社分帳後

大甲寺へ領石

後院の徳云を重

水代心辰中

くしんを了る

上新忠言進下

重白二相

永治寺名

九月廿日

古田 貞徳寺

永

状如件

弘治二年正月廿日

朱印

之中寺

本陣家下

結城左衛門信友

聖紙

右大申寺。銘去年如前。不
才。終。之。出。不。別。以。老。之。於。自
今。以。後。子。軍。勢。早。乙。人。木
燈。好。招。藉。坐。之。信。年。但

近所。者。或。之。他。江。有。地。新
之。入。之。何。時。也。之。打。散。之。作。
仍。必。件。

弘治二年正月十六日

虎ノ朱印ナリ

聖紙

冥申寺 永治家下

横切紙

尚寺領下野國津
宗永内為水代郷

尚寺領下野國津
宗永内為水代郷
甘藷段及法流判書

事於心源之不一者
於遠之不一者

十月廿二日 歐氏抄

裏白到

寺之寺之寺之寺之寺之

佛寺於寺寺寺到
五下寺寺寺寺即
相輝台附寺法友可

以後之不一者相遠雖中
二將不一者也出於白

壬子廿二歲

二月廿二日 梅武成

二月朔日 高相花

寺寺寺
寺寺寺

此外小出家
歷代花押
空無物
表吳一
苑七

景不思成屬其意
何長遠都下仍香
三上寺塔遠下寺
也於遠寺塔在處
以上寺寺寺寺

曹洞流

禪宗

大山

同本抄本
本覺寺末

總德寺

寺記畧曰昔於當西水代村號廣慧寺臨濟宗之古刹也開基不可考後革為曹洞目總德大朝宗賀禪師已前未聞其傳以大朝稱開山大永六丙戌五月十三日去不知喉噴二世象天宗磋和尚道價達後奈良院敷聞大永二年十一月十二日特賜生禪師號並勅書存于今矣自為洞家以來越前宅良慈眼寺之末三代大道宗闡和尚從西水代移來此地境內除官租未知何代所施慶長十三年伊奈備前守檢因郡之時仍舊貫不沒寺田賜免官租畧

寬保壬戌七月

總持寺印住

閑禪默然謹記

一洲翁乃勅書

勅 嵩呼萬歲萬歲仰惟象天宗磋

和尚闡紉固之絕境移祇園名基一作法門之領袖為梵刹紀綱禪者汲道元宗派德者挑天真遺風吞面壁心月光舉揚開眼胷天寬檀信孫枝大椿千子葉松萬歲此翁元來江為本文成七步季為之林乎遠馳仍賜激性禪師也

大永二年十一月廿三日

一 成田龍淵寺記 号曰大朝ハ武州成田龍淵寺第三代
 惟通和尚ノ神足ニノ道德兼備ノ大禪師也我モ
 ト本国下野ニ一寺ヲ建テ請メ岡山ト奉敬セシ
 二 耶ノ一ニ付テ錫ヲ留ス退院ス我後悔頻也ト
 一ハ氏詮方十ク過ツルニ近頃聞ク榎本總徳寺
 二在テ道風ヲ施ス由今般ヲ幸ニ一寺成就十レ
 ハ此大朝和尚ヲ請メ岡山ト成シト頻ニ申上ケ
 レハ晴氏公甚御悦喜有免許シ玉フ盛綱自ラ総
 徳寺ニ至レハ晴氏公寺ニ来テ礼ヲ十ニ恭敬ス
 ト云々 晴氏公重院再無成修所
 盛綱ノ属一寺付盛綱修所

曹洞

禪宗 上別利根那
 双樹寺末

榎本山

妙性院

寺記云一ひりりを藤出羽寺の文書所持

尚方境内有美草池ハ
 移シ山村ヲ護石ノハ
 相考ノ事也
 去西十八里子首口本羽身
 妙性院

曹洞
祥宗 江戸淺草
二月辛未

北条山

觀雲寺 世に靈言信寺

一
宗泰辛酉西祥もと同坐位所天助有在成左とて世所
ノ移りおれ天助あり今に觀雲寺の如く入所ありと成人
りたりまこと善化信寺海内に九十二寺あり内中野寺内
あり十九寺ありまこと之を別へ月八の如別とて世に如寺
たりまこと善化信師の像と珍のまことりて月八持照の後ま
ま未居士とてまのまより世成りたり月八ありてまのまより
師の珍のまよりまのまより珍のまよりまのまよりとて

さねのりや

一
名を撰像七部之場持傳少山家かこ之書

横物

三文紙

中一付別

成一紙下志

如所

享祿二子

骨を承

横塔のそり取

百姓清右所請
聖物

有友右致敵之人討敵之名
感銘の向後拙稿皆忠節可
及之保保之如件
天長元年八月十日

秀綱 藏

馬次平右忠

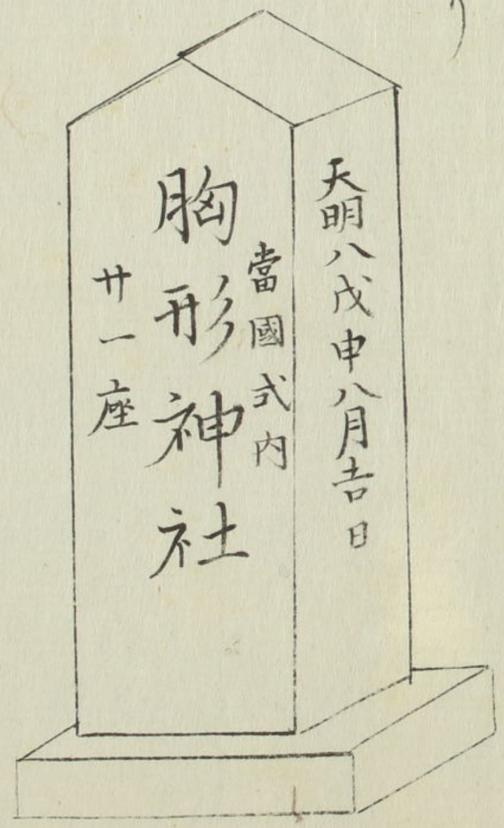
同國定川郡

倭名鈔佐
無加波

一胸形大明神社一字

延喜神名帳定川郡
のうちあり

名居の例示石建より



別當

新我志玄宗

日村龍樹寺

サキ山

醫王寺

社願英神を奉りて

一 右の掛より云此社古文の源と母及揚麻因位は
とて神威ありてはのほりてなりとも村内
揚麻屋敷と唱ふ蘇我とて室八宮社に實り玉保秋
宮とてありて也

一 又同社社と筑紫の家像の社成りて一物とて
宗像軍記より云云柳筑前国宗像ノ大神宮ト申
奉ルハカケテクモ泰モ天照太神ト素戔鳴尊ト
誓ヒ給ヒ十握ノ劔ヲ取玉ヲ所ノ三人ノ姫宮也

茅一宮ト申シ奉ルハ御名ハ田心^{タノコ}姫ト申奉テ田
島ノ宮ニ跡ヲ垂玉ヲ茅二宮ト申奉ルハ御名ヲ
湍津^{ハナ}姫ト申奉テ湍津嶋ニ跡ヲ垂給フ茅三ノ宮
ト申奉ルハ御名ヲ市杵嶋^{フチノ}姫ト申奉テ瀛津嶋^{フナ}ノ
宮ニ跡ヲ垂玉ヲ畧^カ此三女神地神三代天津彦々
火瓊々杵尊ノ御時筑紫ノ六岳ト云所ニ出現シ
玉ヒ御胸ヨリ光ヲアラハシ御肩ヨリ光ヲ放キ
給フニヨリテ胸肩ト申奉ル其後人王七代光靈
天皇ノ御宇ニ至リテ宗像三所ニ鎮座シ玉フ也
夫ヨリ代々ノ帝モ此御神ヲ崇敬シ玉テ御社ヲ

壬建立シ神領ヲモア一々所寄附シ給フ也大政
大臣藤原忠平公ハ了十カ千ニ此御神ヲ尊敬シ
玉ヒ此御神ト現ニ物語十トセサセ玉ヒ御神位
ヲモ申シマサセ給ヒタル由世継ノ物語ニハ書
ケリ足利尊氏將軍筑紫ニ漂シ玉ヒシ時先ツ宗
像ニ至リ此御神ニ祈誓ヲ立玉ヘハマノアタリ
アヤシキ御告アリテ宗像大宮司氏後大勢ニテ
御味方ニ参リ多々良濱ノ一戦ニ打勝遂ニ天下
ヲ得玉ヒ又夫ヨリ今ニ至ル迄神明不測ノ靈徳
仰ケハ弥高天原ノ愛^{メテ}度^クカリケル御神也又日筑

前名寄下卷ニ宗像郡大嶋北嶋に天照右神の神女
宗像のニ^ニ^ニらの娘神の内^ニ^ニらの神^ニ^ニあり由^ニと
日本記神代のも^カ色^ミ中瀧^カと^カき^カと^カら^カれ^カり
夫本集さりと^カも^カと^カ身^カの^カ御^カ事^カハ^カ右^カ島^カの^カ神^カも^カと^カら^カと
多のむと^カり^カを^カ具^カ氏^カ 下

細戸村 小山底

一正一位細戸右明神社一字

神
久樂持甲斐

里人云縁記より同字中の幼清あり天照右神令と

古神若宮と合をあたふとらつて
此後古神といふは田心娘也
村の東邊城石川といふ處と此神といふは田心
字と一字に一つをてつてつて
神事のは例年正月
十日に神祇の親面といふは只五位古神といふ
と古神の神事といふは
古神の神事といふは
古神の神事といふは
古神の神事といふは
古神の神事といふは
古神の神事といふは
古神の神事といふは

細戸古神と書る類と吉田家といふと
得てかたけら
是ら吉田二位殿の年といふや
古神の神事といふは古神
の神事といふは古神の神事
といふは古神の神事といふは
古神の神事といふは古神の神事
といふは古神の神事といふは
古神の神事といふは古神の神事
といふは古神の神事といふは
古神の神事といふは古神の神事
といふは古神の神事といふは
古神の神事といふは古神の神事
といふは古神の神事といふは

一 古城跡 村の西に字西城跡地といふは
今も跡に成り

武家評林系圖

攝政兼家公二男道家公四代後胤

宗綱

八田權守

右大将頼朝卿ヨリ朝光カ母ニ賜下野国寒川郡細戸郷是
頼朝卿母ヲ知シ呂ス二月テ右若身ヲ思召シ付テ依有大功所賜也

知家

八田右門尉從五位下宗綱二男

女

右大将頼朝卿乳母
小山下野大掾政光妻小山小太郎綱光母

古今類聚常陸國誌云小田故城在筑波郡藤原知

家考

舊記

新編纂國東鑑太平記源平盛衰記
嘉吉記小田氏系譜及古老傳説等書

知家先與宇都宮同

祖宇都宮宗綱有二子長云朝綱是宇都宮氏祖也

次云知家號八田氏仕源頼朝有寵食邑常陸國筑

波郡小田地為小田氏
下 下野國吉村郷之石塚村少々の傳
畧 説少く南村又移りてを以て同小田氏

村は居まをた常陸のふしの地
今言ひ知家より移りてを以て同小田氏

一村長須田氏半彦所藏記録云下野国寒川郡細戸

上野十郎藤原朝村者鎮守府將軍秀郷六代後胤

太田太郎行武子小山下野大掾政光三男結城上

野从朝光弟四子也幼而好學六韜三畧最通習焉

長而受母讓安民於細戸郷準父祖之志躬屬於鏃

倉而有名干弓馬及蹴鞠矣歷仁之度隨將軍頼經

上洛而生射小鳥不顯弓術使衆驚歎之云其子下

總守長廣生太郎兵庫長光長光生七郎兵部重朝

迄干此全領郡保城不慮天正之度潛聞北條家臣

松田尾張守荷甲之兵衆多而襲之之意乃集群臣告
 曰自古寡不敵衆孤亦用萬全之計使免民水火之
 難卒爾出城以空客臣家其仁誰憐焉而後其宮內
 村住令耕其城地薄言食之村住卒其胤珍矣嗚呼
 家門之興廢其天哉其命哉朝村者雖以文和四年
 乙未八月二日卒其臣胤十一二今猶存於細戸鄉
 此記源賴朝平治元年八月あり歴行より所をこの文和よりいふ所よりか
 凡百年に當りては又文和よりこの同或百年に於ては終に成るる事いふれ
 を一記し是也古
 のころ成すなり

時宗 孫は朝村也

結城山

孫念寺

寺記曰當寺閻基 人皇九十一代伏見院御宇永
 仁五年丁酉十月遊行二祖他阿真教上人當國御
 化導之砌當寺御建立則御弟子師阿弥陀佛直道
 和上江住職御讓上人當寺建立御年六拾三時也
 此時鎌倉將軍八代文明親王之時也執權北條相
 模守貞時此節領主結城五代之祖左工門尉源貞
 廣彌念寺閻基細戸十郎朝村 下畧

古石塔婆二基多て也

文和四乙未八月二日

崇運院殿底阿月漢大居士

康和三甲申年

貞性院殿皓覺妙圓大姊

朝村去歸の墓中へとて傳へし事なり

都賀郡と記

下宮村

西平庄 橋下口 富田願 谷中口

渡り

市柳と清 苗字殿記

鴻巣河洲の時世者先祖中徳とてく屋浦地土所或及之敵
歩と畑幸而歩成世へ移り沈文洲持きりて今程赤蓮川

家古河沢通りと度毎に麻と下あ力成帯一洋濁と
して出る常例へ相成洲の渡水化とてあり換るの所へ
新造僧後にもに都賀の郡捨つて村に書付せしむる所へ
ありといふ此等物一或も物に少半とて相成村とて
移し物とて持者より潤へ渡りて道り事むしりて今も
目とてあり

判物古文書持傳へりり於今も通

西渡船行のこ

西渡船走の道

儀傳之十上外る

付るしお禮の事お

お預當者越 益卷

西渡島一と人お

後取高也何也
西八月廿日
後取但馬守



野原田池
何中後取但馬守
取高也何也
一取也何也

軍高也何也
西五月廿日
後取但馬守



後取但馬守
取高也何也

此之通も判返一書おなり

此高様考
未考

目

酉年
五月廿一日
後取高

後取但馬守

後取高と高取高
判物申す
家の傳説なり

切紙
高取高
高取高

評定落名寺也
控極まけは仕事
外ふく者之に於て
付るる方なる如
能く分別は道
外あり河内

十月廿四院張

後呂神楽物
非出脚の但

聖物
かゝるの後中上
勢下多きも世調
了り外にすま
法度破るるも
有るは強也



卯卯
月十五

卯大寸四分

古河志卷之下 乾終

2125

